

半日閑話——大田南畝

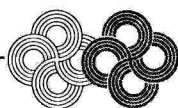
8

日本隨筆大成

第一期

吉川弘文館

日本隨筆大成 第一期 第四卷
昭和二年七月廿八日發行
編纂者 日本隨筆大成編輯部
代表 早川純三郎
發行者 吉川半七
發行所 日本隨筆大成刊行會



日本隨筆大成

〈第一期〉 8

昭和五十年七月二十五日 印刷
昭和五十年八月 十日 發行

編者 日本隨筆大成編輯部

發行者 吉川圭三

發行所 株式會社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三一九一五二（代表）
振替口座東京二四四番

製作 株式會社 たんちよう社

解題

半日閑話 二十五卷

大田南畝 著
後人 追補

本書は、著者の見聞手録で明和五年から文政五年に至る迄の記録である。南畝二十歳の時から七十四歳に至る間の市井の雑事を記したもので、二十二冊、「街談録」と名づけられていた。南畝のこの種の隨筆の中では「一話一言」に次ぐ大著である。南畝は文政六年四月六日に脳溢血で七十五歳の長寿で歿するが、歿後誰人かが「街談録」以外の南畝の文を増補し、更に全然他人の文をも添えて、「半日閑話」なる題号をつけて二十五卷本にしたのが本書である。「半日閑話」はかくして文政十二年や、天保元年などの記事も見える事となつて、南畝著としての純粹さは失われたとしても、南畝自筆の「街談録」の所在が不明とされている今日、やはり「半日閑話」に拠つて其の内容を知るのが一番容易である。活字本としては『蜀山人全集』第三卷及び本大成によつて流布している。『南畝文庫藏書目録』に、「街談録 廿二本 自明和戊子至文政五年」とあるのが、原本の正しい姿であるが、「街談録」はやはり「半日閑話」の大部分を占めているのである。「半日閑話」は写本としては、国会図書館、内閣文庫を初として、案外諸所の図書館に蔵されている。未だ完全なる写本は知られていないようである。本書再刊に当つては国会図書館蔵写本、内閣文庫蔵写本及び無窮会文庫蔵の写本等を読んで、校合を試みたが、無窮会文庫本も十七卷至二十卷までよりなく、二十一卷以後は旧刊の誤植訂正の程度に止めるのやむなきに至つた。今後完本の発見を切に望むことである。なお今度、内閣文庫写本により、「朝鮮人漂着」の一項を加えた。

大田南畝の略伝については、第二期第二卷「仮名世説」の解題の条に略記したので見られたい。

目次

半日閑話

.....一

解題

.....丸山季夫

半日閑話

目次

卷 一

禁裡附勤方	三	浅草觀世音開帳	三
御当家御佳例正月元日献立	三	東照宮百五十回忌参向公卿	三
御煤納御規式	六	牛込船河原掘出の古瓦	三
竹千代様御誕生に付從禁裡御祝儀物	元	根津権現の隨身門	三
若君様御着袴御規式次第	三	坊主白仙	三
將軍家御装束之事	三	飴売の笛	三
武臣装束之事	三	蚊のまじなひ	三
太平棒之図	三	有徳院殿御謚号出所	三
西川清左衛門の話	三	柿本社神階	三
大唐紙	三	国々御朱印	三
延享三年吉原細見序	元	洛中洛外惣町数人家数改日記	三
拳打の図解	元	御扶持方渡之覚	三
京風いろは短歌稿	三	火事場御書付	三
釘隠し	三	寛政七部落雷	三
信州水内郡百姓騒動	三	安永三部落雷	三

卷 二

清水殿逝去に付御書付	六	愷千代殿御養子	三
寛政七年御成	六	青木郷助被召出候事	三
築地本願寺本堂再建入仏	六	品川沖の鯨	三
清水殿御殿諸士被仰渡之覚	六	京都大仏焼失	三
僧侶御仕置	三	豊三郎様御逝去	三
総姫様御事	六	格姫様御誕生	三
非人取締方之書付	六	アダン及筆草	三
金銀出入御触書	六	勢州角屋七郎次御朱印願書之写	三
改曆宣下	六	寂光寺鐘銘	三
西本願寺門跡参向	六	踊船古図并考	三
林大学頭へ被仰渡候書	六	西丸裏門番頭役名	三
寛政九年顔見世	六	奥御祐筆初	三
御連歌	六	清人の仮名書	三
大納言様御成	七	貞享小身者書上	三
豊三郎様御誕生	七	蝦夷制札	三
広忠様二百五十回忌	七	犬毛付書上帳	三
綾姫様御誕生并に御逝去	七	中野御犬預	三

義士名譽
大石内蔵助の人物
史館晴望

卷 四

一柳勘之丞一件
京極備前守病氣退役願一件
戲場回祿年歴録
寛永寺御歴代
和漢同案
今上皇帝御製
幸若音曲由緒
一柳監物一件
一寸八步古法の物七ツ
江戸町人へ御金被下
相州小田原慶勝寺金印
七字の口伝
兼好法師の歌
草山元政法師の歌

二三	契沖法師の歌	二四
二四	和歌三神	二四
二六	林道春の発句	二三
二〇	字典抄書	二三
二三	鶴の紋	二三
二六	鵲退	二三
二六	乾隆帝賀	二三
二六	源氏物語人名	二三
二九	求象牙	二四
二三	房州小泉院境内陥りし事	二四
二三	耀姫君死去	二四
二三	お通が事	二四
二三	広恵濟急方	二五
二三	奥州仙台敵討	二五
二三	諸先生法号	二七
二三	鼠喰田畑	二七

打毬

奈万須盛方の辞世

町々入用減方狂歌

神田祭礼狂歌

卷 五

幸手宿の帯

大仏おほぶつ

山崎宗鑑

木村長門守最期雪操

江戸桜田

年不取川

書物表紙どうさの製法

密陀油製法

朱墨製法

麻笥の字

山の根

上巳

木綿価米価

尾州大風津浪

英一蝶

慶長以来金銀銭

静女の事

鍋消

とろゝ汁

足輕

編笠

様の字

千木 かつほ木

コツテ鳥

十語五草

日本奇跡考抄

世継物語の弁

四家由緒

古銭

三代集人名

一三

一四〇

一四〇

一四〇

一四四

一四四

一四四

一四四

一四四

一四四

一四四

一四五

一四五

一四五

一四六

一四六

一四六

淀河詩

延喜日本紀竟宴歌

元日詩

上槇町珍事

卷 六

国々にて変たる義の事

城のなき国々の歌

海のなき国々の歌二首

京都町数男女数

天女降て男に戯るゝ事

栗の木に文字頭はるゝ事

八左衛門河童と勝負を決したる事

島津貴久記抄

花形名所

後三年合戦絵巻物之内

卷 七

上意御書付

一四 伊奈一件

一四 藤沢山宇賀神縁起

一四 附 南朝門跡の事、御影相承之次第、御夢想の連

一四 歌、藤沢山宝物之引

一三 紀伊国異国船漂着書付

一四 半井家伝系

一四 上野執当より寺社奉行へ差出候書付

一四 越中守殿御作事奉行へ御渡候書付

一四 御用金被仰付候町人

一四 御代官手代へ被仰付候書付

一四 御徒士支配え御書付

一四 禁裡炎上に付伝奏衆へ被遣候御書付並

一四 御用掛役人姓名

一七

一八〇

文武芸道御書付

一四

一四

一四

一四

一三

一三

一三

一四

一四

一四

一四

一四

一四

一七

一八二

寄場人足へ被仰渡候書付

江戸惣町数並男女数

義匠揚名伝

万若君御法号

山岡瀬兵衛由緒書

卷 八

冢田虎奉白川侯文

石川丈山墓碑銘

鳥羽恋塚の碑銘

泔坏マンイ

細川越中守殿中変死

祇園可音物語

藤枝外記変死

与清浜臣和歌狂歌

近衛左大臣の歌

うんすんかるた打方

享和四年大小

宗門の訴

一八 曲淵勝左衛門由緒書

一八 王寧宇紫竹堂五雲子先生系図

一六 善長堂高桑雲元家系

一八 高桑雲元奇談

一八

一九 越後一本木温泉録

一九 武州揚尾宿敵討

二〇 大伝馬町煙管屋娘怪異

二〇 白氣雲出

二〇 文政庚辰年の流言

二〇 大火手紙の文

二〇 長鬚会

二〇 田安御殿のくせもの

二〇 樽屋与右衛門傾滅

二一 絵本太閤記絶板被仰付

二三 御代官御下金

二三 御勘定奉行より村触

一九

一九

一九

一九

二三

二三

二四

二四

二五

二五

二五

二六

二六

二七

二七

二七

留守居御仕置

佐渡御廻米焼失

竜虎梅竹の杖

卷 九

狐狸要鍼医

移梅得鯉

老嫗入室

畦雲道の記

千首和歌草

甲州古鐘銘

橋千蔭文

宇都宮鉄卒都婆

大石主税刀

卷 十

朝鮮国王奉書

蒲生記

細井系図

御神忌濟殿中次第

中山大納言一件

三六	御神忌濟殿中次第	三六
三六	中山大納言一件	三八
三六		

三〇 万事吉兆の図説

三〇 台湾軍談

三〇 素觀道人伝

三〇 擁書城

三三 大坂町中人別

三四 画人汝圭書簡

三五 武蔵志料長歌並約歌

三五 山岡明阿弥文

三六

三六		三六
三六		三六
三六		三六

三三 天野氏証文

三三 上野国村岡系図

三三 牛袋系図

三三		三三
三三		三三
三三		三三

後藤系図

本願寺系図

高田専修寺系図

いつもじ

後藤三右衛門金座改役被仰付

蟻川親元和歌

増島金之丞儒者見習被仰付

雲根志

広徳寺前女殺

秋野新七種

文化七年の災害

卷十一

鴛虎説

寛政度両国橋渡初

東本願寺絵図及平瓦図

大猷院宣下記

敵有院宣下記

文昭院宣下記

二三 日蓮上人文

二五 大河の心中

二五 ヨイ／＼病

二六 秋田雄鹿大地震

二六 武蔵野話

二六 婢髪切

二六 神田藍染川の怪犬

二六 屋根に溺死人落つ

二六 上野山下両士刃傷

二六 中万字屋の幽霊

二六 連歌の式

二五 仰高日録

二五 謝肇淪

二六 象潟神祠碑銘並序

二七 詩文

二七 義奴市兵衛事

二七 月餅

二五

二五

二五

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二七

二六

二六